銀色のシャープペンシル

教室の机も並べ終えたし、あとは後ろにたまったごみをかたづけるだけだ。その時、ぼくは綿ぼこりや紙くずに混じって、銀色のシャープペンシルが落ちているのを見つけた。手に取ってほこりを払ってみると、まだ新しいし、芯も何本か入っているようだ。自分のシャープをなくしたところだったので、ちょうどいいやと思ってポケットにしまった。

一週間ほどたった理科の時間。今日はグループに分かれて融点の測定を行う。グループには幼なじみの健二と、このクラスになって仲良くなった卓也がいる。健二は調子がよくてときどき腹の立つこともあるが、ぼくと同じバスケット部で、いつも冗談ばかり言っているゆかいなやつだ。その点、卓也はやさしくてぼくが困るといつも助けてくれる。対照的な二人だがなぜか気が合って、グループを作るといつも三人がいっしょになる。

理科室に行くと、教科委員が実験器具を配っていた。ぼくは卓也が読み上げていく温度計の値を記録していく係だ。席に着くと記録用紙が配られ、ぼくは準備しようと筆入れからあの銀色のシャープペンシルを取り出した。その時だ。卓也がぼそっと、

「あれ、そのシャープ、ぼくのじゃ……。」

と言った。（えっ、これ卓也の。）と言おうとしたら、すかさず健二が、

「お前、卓也のシャープとったのか。」

と大きな声ではやしたてた。ぼくは「とった。」と言う言葉に一瞬血の気が引いていくのを感じた。

ざわざわしていた教室が静まり返り、みんなが一斉にぼくの方を見た。ぼくはあわてて、

「何を言っているんだ。これは前に自分で買ったんだぞ。健二、変なこと言うなよな。」

と言って、健二をにらんだ。健二はにやにやしているばかりだ。卓也の方を見ると、ぼくの口調に驚いたのか下を向いて黙ってしまった。しばらく教室全体にいやな空気が流れた。

チャイムが鳴り、先生が入って来られ実験が始まった。ぼくは下を向いたまま卓也の読み上げる値を記録していった。卓也がぼくの右手に握られているシャープペンシルを見ているようで落ち着かなかった。早く授業が終わらないかと横目でちらちら時計を見た。でも、時間がぼくの周りだけわざとゆっくり流れているように感じた。本当のことを話そうと思った。でも、自分で買ったなんて言ってしまった手前、とても声には出せなかった。

健二は相変わらずふざけて、班の女子を笑わせている。人の気も知らない健二にむしょうに腹が立ってきた。だいたい健二が悪いんだ。とったなんて大きな声で言うから返せなくなったんだ。みんなだって人のものを勝手に使っているくせに、こういうときだけ自分は関係ないなんて顔をしている。拾っただけのぼくがどうしてどろぼうのように言われなくっちゃならないんだ。それに、卓也も卓也だ。みんなの前で言わなくてもよかったんだ。大切なものならきちんとしまっておけばいい。シャープペンシルの一本ぐらいでいつまでもこだわっているなんて心が狭いんだよ。

「実験をやめて、黒板を見なさい。」

先生の声がした。右手はじんわり汗をかいていた。ぼくはシャープペンシルをポケットにさっとしまうと、みんなにわからないように汗をズボンで拭った。授業が終わると、ぼくは二人の前を素通りし、一人で教室

にもどった。だれともしゃべる気にはなれなかった。

授業後、健二が部活動に行こうと誘ってきたが、ぼくは新聞委員の仕事があるからと、一人で教室に残った。だれもいなくなったのを確認すると、シャープを卓也のロッカーに突っ込んだ。これでいい、ちゃんと返したんだから文句はないだろうと、部活動へ急いだ。

夕食をすませるとすぐに部屋にかけ上がった。勉強をする気にもなれず、ベッドにあお向けになり今日のことを考えていた。

「卓也君から電話。」

母が階段の下からぼくを呼んだ。とっさに卓也が文句を言うために電話をしてきたのだという考えが浮かんだ。ぼくは何を聞かれても知らないで通そうと、身構えて受話器を取った。

「今日のことだけど、実はシャープ、ぼくの勘違いだったんだ。部活動の練習が終わって教室に忘れ物を取りにもどったら、ロッカーの木工具の下にシャープがあって。それに、本当のこと言うと、少し君のこと疑っていたんだ。ごめん。」

卓也は元気のない声で謝っている。ぼくの心臓はどきどき音を立てて鳴りだした。

「う、うん。」

と言うと、ぼくはすぐに電話を切った。まさか卓也が謝ってくるとは考えもしなかった。自分の顔が真っ赤になっているのを感じた。だれにも顔を見られたくなくて、黙って家を出た。

外に出ると、ほてった顔に夜の冷たい空気が痛いほどだった。ぼくは行くあてもなく歩き出した。卓也はぼくのことを信じているのに、ぼくは卓也を裏切っている。このままで本当にいいのかと自分を責める気持ちが強くなりかける。すると、もう一人の自分が、卓也が勘違いだと言っているんだからこのまま黙っていればいいとささやいてくる。ぼくの心は揺れ動いていた。

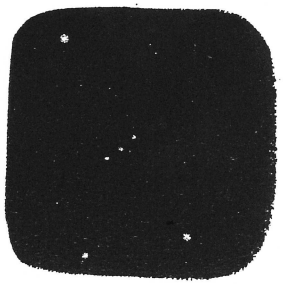
突然、「ずるいぞ。」という声が聞こえた。僕はどきっとして後ろを振り返ったがだれもいない。この言葉は前にも聞いたことがある。合唱コンクールの時のことだ。ぼくはテノールのパートリーダーだったが、みんなも練習したくなさそうだったし、用事があるからと言っては早く帰って友達と遊んでいた。テノールはあまり練習ができないままコンクールの日を迎えてしまった。結果はやはり学年の最下位。ぼくはパートのみんながしっかり歌ってくれなかったからだと言いふらした。帰り道、指揮者の章雄といっしょになった。ぼくは章雄にも「みんながやってくれなくて。」と言ったら、章雄は一言、

「お前、ずるいぞ。」

と言い残して走っていった。

あのときは、章雄だって塾があるからと帰ったことがあったのに、人に文句を言うなんて自分の方がずるいんだと腹を立てていた。今度もそうだ。自分の悪さをたなに上げ、人に文句を言ってきた。いつもそうして自分を正当化し続けてきたんだ。自分のずるさをごまかして。

どれくらい時間がたっただろう。ふと顔を上げると、東の空にオリオン座が見えた。あの光は数百年前に星を出発し、今、地球に届いているという。いつもは何も感じないのに、今日はその光がまぶしいくらい輝き、何かとてつもなく大きいもののように思える。少しずつ目を上げていった。頭上には満天の星が輝いていた。すべての星が自分に向かって光を発しているように感じる。ぼくは思い切り深呼吸をした。そして、ゆっくり向きを変えると、卓也の家に向かって歩き出した。



〈文部省　道徳教育推進指導資料（指導の手引）3〉